

氏 名 : 石垣 健二
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博乙第92号
学位授与年月日 : 平成29年3月23日
学位授与の要件 : 学位規則第4条第2項該当 論文博士
学位論文名 : 身体教育によって育成する間身体性-道德性の礎として-

論文審査委員 : (主査) 教授 瀧澤 文雄
(副査) 教授 海老原 修 教授 伏見 陽児
教授 鈴木 明哲 教授 松田 恵示

学位論文要旨

価値多元化社会の到来とともに、我が国では1990年前後から、他者とのかかわりに対する危機が叫ばれはじめた。本研究のテーマである「身体教育によって育成する間身体性」とは、このような現代社会における他者とのかかわりの問題を捉えるための新たな視点であると同時に、その捉え方の根拠である。本研究の目的は、この「身体教育によって育成する間身体性」を解明することであり、それによって間身体性の育成が、道德性の礎となることを示すことである。

第1章では、予備的考察として、間身体性の理論的背景となる間主観性について概観し、それがいかなる問題であるかを明らかにしている。哲学、社会学および心理学における間主観性について考察した結果、間主観性の問題は、次の5つの問題として示された。それが、①具体的な他者についての問題、②抽象的な他者についての問題、③他者との友好関係についての問題、④他者をいかにして語りうるのかという問題、⑤間主観性と間身体性の関係についての問題、である。

第2章では、間身体性について概観し、先の間主観性の問題を参考にしながら、体育学としての間身体性の問題を明らかにしている。乳幼児の模倣の議論およびメルロ＝ポンティ、M.の間身体性の議論、そして間身体性に関わる議論を検討し、間主観性の問題を参考にしながら吟味した結果、体育学としての間身体性の問題は、次の5つの問題として提示された。それが、①具体的な他者に対する間身体性の問題、②抽象的な他者に対する間身体性の問題、③体育学における間主観性批判の問題、④間身体的アプローチとは何かという問題、⑤「身体」という視点とは何かという問題、である。

第3章では、体育学における間主観性批判を展開している。ここでは、道德教育論批判と体育論批判をおこなった結果、他者との友好関係に資する間主観性の限界が指摘されるとともに、体育学が身体的経験に注目する必要があること、そして間身体性を射程におく体育論が必要になることが示された。

第4章では、「身体」という視点から問うということが、いかなることであるかについて考察している。ここでは、道德性と身体に関わる議論を概観しながら、さまざまな道德性の核心部分に身体の問題が根深く関与していることが明らかとなった。道德性の礎としての身体を育成するた

めには、体育やスポーツにおけるかかわりを身体的対話として成立させる「身体性」や「身体的な感じ」に注目する必要がある。体育学が射程におくべき領域とは、この身体的対話の領域であり、それが具体的にいかなる範囲であるかが明示された。

第5章では、諸分野における他者を論じるための方法、さらには身体運動を論じるための方法について吟味している。そして最終的に、他者の身体運動を論じるための体育学に独自の方法として「間身体的アプローチ」が提案された。間身体的アプローチとは、6つの観点から示される方法であり、それらが相補的に関係しながら、全体として妥当性を確保しようとする現象学的方法である。この方法が、間身体性を分析する際に適用されることになる。

第6章では、具体的な他者に対する間身体性が明らかにされる。ここでは、三位一体としての身体的まなざし・身体的共感・身体的了解と、構造保持・再構造化という5つの身体の働きが明示された。そして、それらが稼動するためには、身体的な感じと身体的実践が不可欠となる。この具体的な他者に対する間身体性は、それらの身体の働きが多様に稼動することによって、また多様な身体的な感じを得ることによってより豊かに育成されるのである。

第7章では、抽象的な他者に対する間身体性が明らかにされる。ここでは、相互に依存し合う身体的一般化・身体的普遍化・身体的われわれ化と、構造保持・再構造化という5つの身体の働きが明示された。また、それらが稼動するためには、身体的な感じと身体的実践が不可欠となる。この抽象的な他者に対する間身体性も、それらの身体の働きが多様に稼動することによって、そして多様な身体的な感じを得ることによってより豊かに育成されるのであり、ここでは同時に身体的な「われわれ」という認識が獲得されるのである。

結論では、身体教育によって育成される間身体性が、次のように整理して提示される。1. 体育学としての間身体性の問題、2. 体育学に独自の方法としての「間身体的アプローチ」、3. 身体教育によって育成する間身体性-その構造-、4. 道徳性の礎としての間身体性の育成、である。ここでは、具体的な他者および抽象的な他者に対する間身体性が、相互に依存し合いながら稼動することが明らかにされ、それらが稼動することによって間身体性がより豊かに育成されることが明示された。そして、身体的な「われわれ」という安寧をともなう間身体性の育成は、自己-他者さらには自己-社会のかかわりの土台となりうる道徳性の礎となることが示された。